

日時 令和8年4月21日（火）10:00～11:45

場所 防災危機管理センター2階中会議室

出席委員（座長以外は五十音順）

伊藤座長、磯部委員、木村委員、近藤委員、鈴木委員、田中委員、東出委員、松田委員（オンライン）

1. 部長挨拶

【川上部長】

おはようございます。土木部長の川上でございます。本日、検討委員の皆様には大変ご多用の中、ご出席賜り、誠にありがとうございます。また、日頃から県政の推進、格別のご支援、ご協力をいただいております。改めて感謝申し上げたいと思います。ありがとうございます。

さて、本県の人口でございますが、この3月で98万余りとなりました。この一年間で1万人が減少している状況でございます。こうした状況は本県に限ったことではございませんが、人口減少や少子高齢化が関連する様々な課題に対しまして、県庁を挙げて取り組んでいるところでございます。

県では、昨年度、「持続可能な行政サービスのあり方」を未来志向で検討したいということで、「未来へつなぐ行政サービスのあり方検討会」を設置し、議論いただいているところでございます。

昨年度の検討会では、公共インフラにつきましてもテーマとして取り上げまして、現状や課題、それと特に県が管理する橋梁の老朽化の状況ですとか、今後の見通しについて共有させていただきました。

その検討会での議論におきまして、道路・橋梁をはじめとしたインフラのあり方について検討したいということで、「未来へつなぐ持続可能なインフラマネジメントのあり方検討ワーキンググループ」を設定いたしました。

委員の皆様には、ご協力いただきたいと思います。また、座長につきましては、本県の橋梁等のインフラに精通されておりまして、県の委員会にも多数着任していただいております、富山県立大学の伊藤先生にお願いしているところでございます。

このワーキンググループでは、県だけではなく、市町村、あるいは民間も含めて、広域的な視点で、またこれまでの考えに捉われない、いろいろな視点で、道路・橋梁を中心としたインフラをどのように維持管理していくべきなのか。また、こういったインフラの将来像を、県民の皆様にもどのように自分事化としていただく、その推進のためにはどのようにしていったら良いかといったことについて、それぞれの立場から忌憚のない意見をいただければと思っております。本日はどうかよろしく願いいたします。

2. 議事説明及び意見交換

【伊藤座長】

座長につきました県立大学の伊藤でございます。よろしくお願ひします。今回のお話をいただきまして、課題は皆さんの共通認識で持っていると思います。先ほど川上部長からもお話がありましたように、課題は、インフラ、特に橋梁をどうしていこうかということを考えていくというワーキングになっております。

先ほどもありましたように、こういった問題は、どこかに負が生じるのを、どうバランスを取っていくかというか、二律背反のところとか、あとはトレードオフのところ、ジレンマのところがたくさんあるところで、どこに落としていくかという、あと明るい方向にどう持っていくかというところが重要なな思っております。

先ほどの川上部長からもありますように、これまでの考えに捉われないということが大事かなと思っておりますので、しばらくはアイデア出しというんですかね、ブレインストーミング的なアイデア出しをしていって、どこに落とすかということとか、明るい方向にどういうふうに持っていくかということを考えていけばいいかなと思っております。ざっくばらん、あと忌憚のないご意見をいただければと思っておりますので、本日はよろしくお願ひいたします。ありがとうございます。

【事務局】

事務局から資料1～4に沿って説明

【伊藤座長】

ありがとうございました。盛沢山な内容で、ちょっと理解が追いつかないところあるかもしれませんが、これからですね、議題の「(4)」にありました意見交換に移りたいと思います。時間も限られておりますが、できるだけですね、委員の皆さんとの意見交換の時間をとりたいと思います。よろしくお願ひします。

40分ほどいただいております。今ほど事務局から説明が今後のスケジュールも含めて4点ありましたが、ご質問も含めてですね、委員の皆様にはそれぞれの立場からですね、お気づきの点等、ご自由に討論を始めることにします。

第1回のワーキングですので、皆さんから簡単な自己紹介等を含めて、1人ずつ順にご発言いただきたいと思っております。名簿順にお願いできればと思いますが、時間の都合もございますので、1人5分程度でお願いいたします。

その後ですね、1順目が終了した後に、皆さんの意見をもう一回追加でご意見いただくということも考えておりますので、よろしくお願ひいたします。

じゃあ、よろしいですね、磯部委員からお願ひいたします。

(以降、五十音順で発言)

【磯部委員】

射水市の副市長をしています磯部と言います。どうぞよろしく願いいたします。

普段は、「道路だけ」、「このインフラだけ」など絞った議論というより、どちらかという箱物に関する議論を行っています。射水市は合併市なものですから、地域に偏在して、かなり大きな箱物を抱えておりまして、我々の言い方で「縮充」という言い方をしておりますけれども、今後どうやって、縮減して充実させるかというそういった議論を日々行っています。今回、このワーキングに参加させていただくことは、そういった点では新しい視点をいただくということであり、大変ありがたいと思っています。

資料でご説明いただきましたのは、それぞれに大変よく作り込んでありますし、ごもっともな内容、あるべき方向であろうなど、これは激しく同感を持つところになります。

ただですね、じゃあそれをどうやって県民の方、市民の方、ユーザーさんにお伝えするかというのは、やはり一番大きな問題だろうし、おそらく議会、有権者の方も含めてですが、そういった関係の方にどうやってご理解いただくかというのは大変苦労されているところだと思います。

ですから、自分事だと考えることが大変大事なところであることは、私も大変共感するところでありまして、今回「資料3」でお示しいただいた、5ページ、6ページのあたりに書いてありますが、「インフラに対する理解と意識を持つ必要」、「自らがインフラを支える担い手であることの意識の醸成」ということは、まさしくこの通りだと思います。

例として挙げていただけてますが、「重要橋梁を通行止めにして、インフラのありがたみを理解してもらおう」というのは、これは橋の休日を作るという社会実験として、もしくは災害時のシュレーションに確かに使えるなかなかすごい取り組みかと思っております。また、小学生期からインフラに親しむ取り組みというのは、これは橋梁に限らず、上水道ですとか下水道ですとか、なかなか普段見ないインフラを小学校のプログラム、授業として、すでにご実施していただいていることも含めてですが、そのあたりを応援していければなと思っています。

シンポジウムに関しましては、関心のある人しか集まらないなど考えられますので、このあたりはよくよく考える必要があるかなと思っています。そのあたりのアイデアを皆さんと共有させていただくことはありがたいと思います。

【伊藤座長】

ありがとうございました。自分事化のアイデア出し、どう発信するかが課題ということですね。はい、ありがとうございました。それでは木村委員、お願いします。

【木村委員】

整備局で地域道路調整官をしています木村と言います。よろしくお願いします。

私は4月からこの立場となりまして、何をお話しすれば良いか考えたのですが、昨年度は違う部署で、国のインフラマネジメントの取り組みで市町村の支援を担当しており、いろいろと自治体からのお話を聞きながら取り組んだところもあり、そのお話を交えながらと思っております。

国では、2012年の笹子トンネル事故があり、2013年からメンテナンス元年として、メンテナンスサイクルの確立や、地方公共団体の財政支援など取り組んでおり、点検もしっかりと回りどこが悪いかもわかってきました。

一方で、どこが悪いかわかったとしても補修がなかなか進んでいかなのはなぜだろうかと国は検討したなかで、市町村では人材や財政面が厳しい状況下もあり、インフラメンテナンスにたどりつけない状況もわかってきました。国では2022年から「地域インフラ群再生戦略マネジメント（通称「群マネ」）」として、行政や民間などいろいろな関係者が、連携・協働しながらインフラメンテナンスに取り組む施策を進めています。

「資料1」の検討会概要では、このような取り組みがしっかり書かれており、将来推計などデータ分析や、分野横断などの取り組みのほか、官民連携や、見える化などにも取り組む方向性など、国の方の施策とも一致するものです。

「資料3」についてご説明いただきましたが、「優先順の考え方・指標となりうる性能」について、キーワードが羅列されていますが、機能面から考えると緊急輸送道路や、路線の重要性、孤立リスク、災害であり、常時・災害時と分けて考えなければならないですし、性能面から考えると設計年次や、健全性など、将来にわたり担保しなければいけないところでもあります。一方で景観・歴史的価値という面もあり、ある程度グループ化や整理することで、考え方が見えてくるのではないかと思います。

また3ページが富山県の一番苦勞するところでありまして、都市部と山間地を分けて考えないといけないのかなと思います。都市部については、河川が多いなかで河川横断箇所をどう集約するかというところですが、山間部については、1路線に橋が連なっており、集落を団子の串のようにいくものですから、どの橋も大事となり苦勞されるポイントではないかと思います。

インフラの自分事化については、国としても一番大切なところと考えており、住民が自らどこまでなら許容できるかというポイントが非常に大事かと思いますので、今回の会議の中で皆さまと一緒に考えていきたいと思っております。

【伊藤座長】

ありがとうございました。県が市町村をフォローするような仕組み、群マネの話と、国の施策としては、方向性としては国の施策と合っているということで、それを絞り込んでというんですかね、重点的にやっていくということと、優先順位に関しては総合的に判断しているということですね。自分事化については、個

人が許容できる範囲はどのぐらいかということを見極めながらということの話がありました。ありがとうございました。そうしましたら、近藤委員、よろしくお願いします。

【近藤委員】

よろしくお願いいたします。近藤と申します。名簿の方には、富山商工会議所の肩書きと、あと会社名、近藤建設という社名がございまして、弊社はどちらかというとインフラ整備よりも、箱物を建てる建築を主たる業務としておりまして直接、今お話出ています橋梁ですとか、道路維持に関わるお仕事は実際しておりません。

ただ、富山県建設業協会の常任理事として、いろんな県内の同業の皆さんからいろんな声は聞かせていただく立場におりますので、その立場からいろんな質問というか、コメントといいたいでしょうか、させていただきたいと思います。

まず、今ほど言いました通り、建設業に身を置く立場としましては、地域の守り手であり、安心安全のつくり手という意識を皆さんそれぞれお持ちです。その中で、持続可能なインフラマネジメント、それと維持管理、更新をしていくときには、間違いなく富山県内のそれぞれの地域の、地場の建設会社さんの力が必ず必要になるはずで。そのときに、やはり平時のうちに修繕工事を計画的に平準化していただくっていうのが間違いなく必要なんですけど、そこで先程この「資料3」の4ページ目に書かれている「令和の公共インフラニューディール計画」、こちらについて県民の皆様のご理解をいただきたいというお話がありましたが、ぜひ建設業協会を通して事前に地元の建設会社の皆様にもご相談なりご説明をいただけたらなというふうには、これはお願いとして話をさせていただきたいと思います。

それで2番目のテーマにつきましても、インフラの自分事化の企画も、ここに置かれている「建設ジョブフェス エssenシャルな仕事であることを印象づける写真展」ですとか、「小学生の皆様親しんでもらう」この取り組みもすべて富山県建設業協会の青年部の皆さんが実施しておられます。

昨年11月にも富山県に建設業協会として予算等の要望書を提出した際に、エssenシャルワーカーとしての日頃の仕事についての理解、そして人手不足に対してのご協力をいただきたいということも要望書に盛り込まれておりますので、ぜひその観点も持っていただきながら、今回のいろんな計画と一緒に進めていくという認識を両方で持ちながら進めていっていただければなと思っております。

冒頭に議長がおっしゃられたお言葉に、明るい方向にどうやって持っていけるかっていうことを私もすごく大事なことでないかなと思っておりますので、先ほども「縮充」というお言葉ありましたけど、実際目減りしていくところをどうやって明るい方向性を持ってうまく組み立てられるかっていうことを重点的に考えていけたらいいんじゃないかな感じました。

【伊藤座長】

ありがとうございました。まずは先ほどのニューディール政策ですね。集中メンテナンスの方向性を地域の会社の方や、県民の方に分かるように説明していただくということと、あとケンセツジョブフェスのようなことを県と建設業協会と一緒に進めさせていただいて、より良いものにしていくということと、あとは明るい方向に結論として持っていきたいということの話がございました。

はい、それでは次に鈴木委員、よろしくお願いします。

【鈴木委員】

皆さま、はじめまして。公募の委員となりました鈴木佑実と申します。

現在、0歳児の赤ちゃんと小学生を育てる母親でありまして、あとは防災士として地域防災に関わっております。本業はアナウンサーとして放送やSNSなどを通して日々社会に伝える仕事をしております。どうぞよろしくお願いいたします。

まず一つ目のテーマについてですけれども、優先順位ということが先ほどから話題に出ていますが、母親の視点としては、なるべく通学や通院、子育てに不可欠な生活のインフラを最優先にしてほしいなというような願いがあります。その際に、どの橋をどのような順番でかけ直すのかとなった時、点数だということもありましたけれども、ぜひそういった見える化をしていただいて、わかりやすくしていただくと大変ありがたいです。

橋のカルテのようなものを作っていただいて、県民の皆さんに共有してもらうのも一つ方法かなと思いました。あとは点数化するとき、ひと口に交通量といっても、子どもが通るのか、トラックが通るのかでも、全くその内容が大きく異なると思います。ですので、点数化する際の指標につきましては、住民の皆さんのお話もよく聞いていただいて、ヒアリングをしながら検討する必要があるのかなと感じています。

それから、防災士としての視点では、災害時に命を守る避難ルートですとか、緊急輸送道路については最優先じゃないかなと考えております。特に国道156号沿いの山間部の橋梁ですけれども、老朽化が進んでいるだけじゃなくて、代替ルートが極めて限られているという特徴もあるかなとお見受けしました。ぜひですね、能登半島地震ですとか、能登豪雨などの知見も溜まっていると思いますので、そういった教訓もぜひ活かしてほしいなと思うところです。

そして2番目のテーマについて、インフラの将来像をどのように自分事化するかということなんですけれども、なかなか実は恥ずかしながら、私、このワーキンググループに参加するまで、そこまで橋のこと、道路のこと、どこが県道で、どこが違うなど、なんかそういうところもなかなかですね、考える機会がこれまでありませんでした。

でも専門家の皆様のこういった議論というのは、県民の行動を変える力を持っていると思います。でも、その情報が生活者に届いていないとするならば、これは伝え方を変えてみる、専門家の皆さんの知見を社会

に届ける仕組みを作るということも方法かなと考えます。県民に理解してもらうために、専門的な情報を生活者の言葉に翻訳する作業が必要になってくるのではないかなと思います。

例えばですけれども、「この橋は健全度Ⅲなんですよ。それが増えてます。」じゃなくって、「この橋が通れなくなると、通学の時間が20分増えますよ」みたいな風に言い換えていただく。予防保全が重要ではなくて、「今10万円かけたら10年後100万円の修繕を防げるんですよ」みたいなですね、生活の単位に置き換えていただくことで、一気にインフラが自分事になるかなと思います。

せっかくのワーキンググループですので、どう伝えれば皆さんの理解や行動につながるかといった部分も議論する場を設けることを提案したいなと思います。あと、それからインフラの自分事化を促すということで、いろいろな取り組みがこの「資料3」のところで紹介されていましたが、いいなと思いました。

先ほどもお話出ていましたけど、橋を1日通行止めにする、とても面白いなと思いました。橋を通行止めにして何をするかなんですけれども、自分事化を促すという点では、親子で楽しめるイベントがあると、子育て世代の意識の醸成ができるのではないかなと思います。

例えば、橋の上で重機のテーマパークを開催したりですとか、あとどうせ通行止めにするなら花火大会に合わせて通行止めにして、その上で皆さんで花火を見るとか、すごく楽しい発想がどんどん湧いていきそうな催しができそうだなと個人的に考えておりました。

そしてマスコミの視点からすると、先ほどもありましたが、やはりシンポジウム系よりも動きのあるイベントの方が映像としてもバリエーションが多いので取材しやすくなる。あとシンポジウム系だと結構1分ぐらいでニュースとか終わっちゃうんですけど、なるべくこの放送尺を長く伸ばしてもらおうという点ではですね、動きのあるイベントの方がいいんじゃないかなと思っています。例えば、橋を通行止めにしてSNSで展開するショートドラマを撮ってみるとかね。織田裕二さんに橋を封鎖してもらおうとか。

ちょっと長くなりそうなので、このワーキンググループでぜひ皆さんの、専門家の皆さんの知識と生活者の実感をつなぐ、私は橋としてお役に立てることがあればと考えておりますので、改めてどうぞよろしくお願いいたします。

【伊藤座長】

ありがとうございました。優先順位ですね。生活直結を優先するとか、あとは住民の意見を聞くとかですね、あとは防災の意識・観点を入れるということがございました。

2つ目が、いろいろ難しい言葉が出てくるけど、その伝え方が大切だという話がありました。3つ目には、動きのあるイベントが良いということで、橋を通行止めする場合はそこで何をするかということを考えて、イベント化してしまえば、その橋を通行止めにするということがプラスの方向に働くということがございました。また、見える化をするために橋のカルテを作って皆さんに伝えるというお話もありました。では続きまして、田中委員です。

【田中委員】

はい、初めまして。日本政策投資銀行の田中と申します。私は普段は富山県内の経済とか金融に関する調査、情報発信、あとは企業の設備投資動向等々、そういったところの情報発信を担っているという状況でして、インフラマネジメントっていうのを専門的にやっているわけではないということでもあります。

ただ、地方創生に関わるいろいろなプロジェクトのご支援なんかもやらせていただいていますので、金融とか経済の観点からですね、いろいろコメントができればなというふうに思っております。

それで、今回のワーキンググループの議論ですけれども、基本の方向性として、持続可能なインフラマネジメントの方向転換だとか、あと自分事化というふうなところについては非常にいろいろご説明いただいた中で、全く違和感がないというような状況でございまして、まさに人口減少とか財政制約、こういったものを勘案すると新たなインフラよりも、既存のインフラを維持・修繕して、ライフサイクルコストを低減していくという方向性というのは試行できるのかなというふうに思っております。

議論の方向性の中で、持続可能なインフラマネジメントへの方向転換というふうなことが掲げられておりますけれども、これ私は親会議でもちょっと申し上げたことではあるんですが、これも優先順位をどういうふうにつけていくかっていうようなところで、大前提としてやはりこの富山県内の橋梁も非常に大きく、数も多いと、あと劣化のスピードも速いというふうな中で、やはりこの足元の財政の制約みたいなものも勘案すると、やはり現存する橋梁全てをやはり更新していくっていうのは、財政的に非現実的じゃないかというふうに思っております。

なので、使えるうちは基本的に長寿命を図りつつも、将来的な人口減少とか交通流動とか、そういったものに配慮しながらやはり架替はしないというふうな選択肢についても検討していくべきではないかというふうに思っております。

これについては地域住民との合意形成というのが非常に大事になってくるというふうなことでありますので、「議論の方向性の②」にあるような、自分事化みたいなのところの取り組みも地道に進めていく必要があるというふうに思っております。

その辺の前提を事務局の方々には確認をしておきたいというふうなところでございます。

具体的に持続可能なインフラマネジメントをしていくにあたって、議論の方向性の中に示されている、優先順位の考え方、主要となる性能というふうなところについては、私も専門家ではないので、詳しいことはわからないんですけれども、一つはですね、富山市がやられている橋梁トリアージの取り組み、こういったものを参考にされてはいかがかなというふうに思います。

基本的には社会的な重要性和損傷度に応じてですね、ランクを決めていくという取り組みをされているというふうに伺っておりますので、そういった取り組みも参考にしながら、指標みたいなのを考えていくのも一つの手ではないかということと、あと自分事化というところについても橋を使わない日を作るところは非常に面白いアイデアかなというふうに思いましたし、シンポジウムみたいなものよりも、こういっ

た形で少しインパクトのあるような取り組みをしてみてもいいんじゃないかというのが一点と、あともう一つは、やはり地域住民というか、市民にとってこの橋が県のものなのか、市のものなのかっていうのは、あまり関係がないことをございますので、こういった官民連携というか、官官連携といいますか、まさに橋梁トリアージとかを進めておられる富山市と共同で、こういった自分事化のプロジェクト企画をやる。それによって、より多くの市民の方を巻き込んでいくという取り組みなんかも面白いんじゃないかなと考えるてもいいんじゃないかなというふうに思いました。

【伊藤座長】

ありがとうございました。

メンテナンスへのシフトは違和感がないというか、試行をした方がいいという話と、あと2つ目の質問という感じでいいですかね。確認ですかね。全ては難しくて将来、架替ないという選択をしてもいいのかという話ですね。

あとは3つ目としては、インパクトのある取り組みをしていくということで、官官連携もということですね。富山市との大きなプロジェクトをやるてもいいんじゃないかということですけど、事務局から何かありますか。今のご確認なんですけど、架替をしないという方向性で考えてもいいのかどうか。

【事務局】

ありがとうございます。まず持続可能なという観点の最終ゴールとしては、そういった考えも当然あり得るのかなというふうには考えておりました。予断を許さず、議論をしていただければありがたいなと思っております。よろしく申し上げます。

【伊藤座長】

ありがとうございました。それも含めて議論していいということで確認がとれました。ありがとうございました。それでは東出委員お願いいたします。

【東出委員】

東出です。よろしく申し上げます。私は富山市にあります株式会社アイベックで非破壊検査という事業をしております。その事業の中に、橋梁の点検であったり、あと、補修設計であったり、このインフラマネジメントに関わる仕事をさせていただいております。

そして、この親会議に参加させていただいております。本当にこの道路・橋梁に関わる持続可能なインフラマネジメントについては、本当に大切な議論だというふうに思っております。それですね、すごくわかりやすく、いろんな資料を出していただいて今この富山県で、このインフラの状況がどういうことかって

ということがよくわかりましたし、あとこれからですね、2060年に60万人台という県民の人口になるっていうところで、そこに向けてどのように今私たちが動くべきか、ウェルビーイングな未来を残すために何をすべきかっていうところが本当に今、行動として求められているところかなというふうに理解しております。

実際に富山県の管理の橋が800橋以上ある中で、予算も人員も限られているっていうこの現実で、やはりすべての橋を生かしていくということはあまり現実的ではないのかなと私も感じております。

今、優先順位を決めてっていう話なんですけど、優先順位は先ほど田中委員もおっしゃられましたように、例えば富山市さんの事例であったり、あといろいろな本当に専門家の方々の知見であったりで決めていく必要があると思うんですけども、やはりここで最近私が聞いて、なるほどと思ったんですけども、公共事業は法にかなない、理にかなない、情にかなうものであるっていうお言葉を聞いて、やはり法律があって理にかなうだけけれども、やはり最後にこれは県民全員のインフラですし、私たちの税金で作られているものですので、その住んでいる住民である人たちの情っていうのをきちんとかなえる、この3点をかなえるっていうことが本当に大切だなというふうに感じております。

ただ、この情にかなうものっていうところが本当にいろんな方々がいらっしゃいますし、皆さんいろんな違う地域に住んでいらっしゃいますし、いろんなお仕事をされていたり、本当に簡単なことではないことはもちろんですけども、そこをどうやって全体を方向性として引っ張っていくかっていうことが大切だなというふうに思います。

先ほど鈴木委員もおっしゃられたように、生活、自分事っていうのは本当に大事だなと私も感じておりまして、自分の生活とこの社会インフラが密接に関わっているということをいかに理解してもらってかかっていうところで、「橋のカルテ」っておっしゃいましたけど、本当にそういうものがあるとわかりやすいかなっていうふうに思いました。そのカルテの中にはやはり事実ですよ。情にかなうためには事実としてのデータであったり、あと分析であったりがきちんと記載されているっていうことがすごく大切かなっていうふうに思いました。

自分事っていうところですけども、橋って今、橋のことばかりクローズアップされていますけれども、この生活インフラの一部として、例えば橋がないと橋と付随してあるのがライフラインで、例えば水とか水道橋とかありますし、橋をまたいで電話線だったり、光ケーブルなどのデータの中心があったり、電気とかガスとかも川をまたいで通して行っているわけですよ。

もし橋が劣化して使えなくなったら、そういうインフラが使えなくなるっていうような事実とかをもっと分かりやすく知ってもらって、その橋の重要性っていうのを体感するような、そういう試みなどがあれば、いいかな。生活の単位に置き換えるっていう、本当にそこが大事かなというふうに感じました。

それで、自分事化の企画のところ、私も参加させてもらったんですけども、富山大橋の清掃ボランティアっていうのがあって、市民として参加したんですけども、本当に行ってみると、すごくいろんな気づきがあって、普段車でしか通ったことがないところで清掃したり、きれいにしたりすると本当に気持ちいい

いですし、いろんな景色、新しい景色が見えたりしていきました。この清掃ってすごくウェルビーイングにも通じているなというふうに思っていて、有志であったり、興味のある方々、市民、県民の皆さんがもっと橋に興味を持ってもらって、清掃活動とかをしながら愛着を持っていてもらってという、そういうのってすごく大事だなというふうに思いました。

実際ですね、全国でいろんなところでこの橋の清掃って行われていまして、それぞれやはり地域を良くしたいとか、元気にしたいとか、いつも綺麗でいたいとか、いろんな思いでされている方々がたくさんいらっしゃいます。こういう方々を集めてというか、その小規模でもいいので、例えばこういう清掃、橋の清掃を中心としたサミットみたいなもので、そういう活動をどんどん草の根運動的かもしれないですけれども、広めていって、そこでじゃあ例えば内川の橋もきれいにしようとか、いろいろなアイデアとか行動が出てくると、なおいいかなというふうに感じました。

【伊藤座長】

ありがとうございました。何点かあったかと思いますが、まず橋梁を維持、すべて維持していくのは難しいということで、今すぐに行動が求められている時に来ているという話があります。

2つ目は、優先順位をつけるにしても、その住民目線という「情」にかなうというところが大切だという話ですね。

3目については、自分事化のところで「橋のカルテ」ということに賛成で、やっぱり体感的にっていうんですかね、わかりやすくするというのと、先ほど木村委員からもありましたけど、事実、データに基づいてそれを分析して、それを見える化していくということは、市民、県民、住民に伝えられるということがありました。

最後に、その橋に対しての愛着とか、地域を良くしていくというこのアイデアとしてご紹介をいただきました。ありがとうございました。

それでは最後に、松田委員からオンラインでお願いいたします。

【松田委員】

皆様、画面の向こうより失礼いたします。京都大学防災研究所の松田曜子と申します。どうぞよろしくお願いたします。

私は京都大学で土木工学を学びまして、2年前から京都大学防災研究所の教員に戻ってきているものです。専門は住民参加型の地域防災というテーマで研究に取り組んでおります。

2024年の3月まで8年ほど長岡技術科学大学におりまして、その際には富山と同じく雪国で暮らした経験もごございます。今、土木学会でインフラ自分事検討会という、まさにこちらの内容と同じ課題を土木学会という専門家の団体で検討するという取り組みをやっておりまして、私もその委員を務めております。

今回、県の方にはその関係でお声がけいただいたという経緯になります。どうぞよろしく願いいたします。

たまたま名前が五十音順で、順番が最後に回ってきたんですけれども、皆様の議論を聞いていて、もう私もそちらに飛んで行って一緒に参加したいなというくらい、とても興味深いご意見がたくさん出てきて、非常に今後楽しみな検討会だと感じております。

皆様のご意見が出てきた中から、思いついたことをお伝えしたいと思います。

まず、今申し上げた土木学会のインフラ自分事検討会のシンポジウムが、たまたま先週東京でございました、そこでも議論に参加をしてきたのですが、最も印象的だったのは「自分事」ということなんですけれども、これまで戦後ずっとある意味では自分事にならずに済んだ時代だったわけです。

インフラが自分事でなくても、勝手に知らないところで誰かが補修をしていて、誰かが管理をして、そして不便だなと思うところには勝手に橋がかかっていたという時代でした。

ですので、ある意味では自分事にならないでいられるというのは非常に幸せなことです。だけれども、今後の未来はそうではなくて、災害の発生がまさに自分事になる究極の瞬間だと思いますけれども、災害のみならず、このように更新がされないとか、メンテナンスがされないで脆弱な状態が続くというのは、否応なく自分事にされるという時代が来ってしまうという状況にあるのかと思います。ですので、自分事でなかったものが自分事にならざるを得ないことは非常に嫌なこと、避けたいことというふうにも受け止められる。でもそれをいかに、そうなる前に、ポジティブな形で、私の橋と、私のインフラというふうにつえられるかっていうのは、非常に工夫を要することだということを確認する必要があるということです。

それから、鈴木委員のご発言の中で、子育て中で生活者としてのインフラというお話あったかと思えますけれど、女性の交通行動”を表すキーワードとして、別の研究者の方が送迎人生とか送迎交通という言葉で、研究プロジェクトを始めています。富山の方も非常に多くの方がこれを経験すると思うんですが、ご主人だとか子供の送迎に一日追われると。この送迎の交通ってというのは非常にこう複雑なトリップなんですね。病院行って、おじいちゃんの病院から帰ってきて、今度はお父さんのお迎えして、そう思ったら子どもが今度学校のお迎えみたいな感じで、とても複雑と。

現在の交通計画がこの複雑な送迎のトリップチェーンにどこまで対応できているのかを考えるとというのが、この研究をやっていらっしゃる方々の動機なんです。

パーソントリップ調査が捉えている交通行動もごく一部ですし、主として都市の中心部と郊外を往復するだけの、いわゆる通勤を標準とする交通形態に対応しているんだけれども、先ほどおっしゃっていたような、子供の徒歩の通学も含めて、複雑な生活の中でのこの交通にどこまでインフラが適用できているのかっていうのは、やっぱり優先順位を考える上でとても重要な話だし、重要なのは現在の評価方法がそれに十分対応していないのではないかとということではないかと思っています。

ぜひこのあたりも、もう一段議論を深めると、優先順位を決める上で非常に重要な示唆が得られるのでは

ないかと思えます。それから、間にもう一つ挟みますと、近藤委員は建設業協会でも要職を務めておられるというふうに伺いましたが、私もずっと土木におりまして、特に大学に戻ってからは人材を輩出する側におりますので、この土木という仕事の魅力を若い方に伝えるという大変さと、それから重要性というのをとても感じております。

その中で、防災という仕事をしている関係上、建設業協会の方々と議論をする機会も大変多くありまして、それからもう一つ、私は自分のキャリアの中で、被災者支援のNPOで働いていたこともあって、こういった被災者支援に携わると、建設業協会の重要性っていうのは本当にひしひしとを感じるんです。

ただ、そういった災害時に建設業が果たす見えていない役割を見える化するというのも、これも今回のテーマの中では非常に重要だというふうに思っていますので、ここで議題出しをしておきたいというふうに思っています。

それから最後、皆様が言及されていた橋をちょっと止めてみるという、この自分事化のイベントの計画ですけれども、冒頭に磯部委員でしょうかね、なかなかびっくりするけど難しそうだなという声もありましたけど、多分これを管理する側からしてみると止めてしまうっていうのは、上がってくる声を考えると難しいということも当然あり得る意見かなと思います。

ただですね、先週のシンポジウムでも挙げられていた事例っていうのは非常に小さい単位、コミュニティあるいは自治会とか町内会とか、あるいは小河川の流域とか、とても小さい単位で行われていたイベントが紹介されていました。

最初は非常に小さいものでいいと思うんですよね。例えばどの橋を止めるかっていうのも、町内会の皆さんとか、市の一部の学区の皆さんとか、そのぐらいの小さなレベルで決めてもらうことから始めると、決めること自身が、どの橋が自分たちの地域にとって一番気になる橋であるのかということを経験する機会になると思いますので、本当にその小さな、身近なところで橋を気にするという機会から始めるのが、後々ですね、数年経って、じゃあ今度は市域全体で考えてみよう、あるいは県でいくつの橋を止めてみようとかですね。大きな流れになるかもしれないということを考えますと、小さなところからスタートするというのが、とても重要な意味を持つことになるんじゃないかというふうに思った次第です。

少し長くなりましたが、以上となります。いずれはそちらに伺って皆さんと一緒に議論したいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

【伊藤座長】

ありがとうございました。4点あったかと思いますが、自分事化に関して、やはりいろいろ工夫が必要、「私のインフラ」ってなるところまでは工夫が必要であるということですね。

2つ目に関しては、鈴木委員の意見を踏まえて、優先順位を決めるときはですね、送迎とかも含めて、生活者の目線で交通形態を考える必要があると。

3つ目に関しては、近藤委員の意見を踏まえてですね、土木の魅力、建設業協会の魅力を、どう災害の時に役立てていくということも含め、魅力を伝えていくということ。

4つ目に関しては、その小さな単位でのイベントを進めていくというような発言がございました。ありがとうございました。

それではですね、ちょっと時間がだいぶ押していますが、一周した中で、追加で発言があればお願いできますでしょうか。じゃあ、お願いいたします。

【木村委員】

先ほどからの委員の皆様のご意見を聞く中で、地域の住民にとっては、利用している道路が国であろうが、県であろうが、市町村であろうが関係ないということは、ごもっともでして、道路はネットワークとして機能しており、また全体の道路の65%程度が市町村で管理していることから、県におかれましては市町村との連携を取りながら、一緒になって対応いただけないかなというお願いです。

富山市の様に先進的に一生懸命やられているところは非常に稀でして、多くの市町村においては、担当者も少なく、インフラマネジメントも考えられないという現状であり、よろしくお願ひしたいと思います。追加で発言させていただきました。

【伊藤座長】

いえ、ありがとうございます。私も「群マネ」については追加で聞こうかなと思っていましたので、ありがとうございます。補足いただきまして、他にいかがでしょうか。皆様から追加があればよろしくお願ひします。

はい、それでは少しまとめの時間を取りたいと思いますので、その時に補足いただければと思います。よろしくお願ひします。

では本日、皆様から貴重な意見をいただきましてありがとうございました。

これまでの意見を踏まえてですね、少しまとめていきますので、皆さんに追加がございましたら、ぜひお願ひいたしたいと思います。

うまくまとまるかわかりませんが、まず考え方としては、やはり先ほど、近藤委員からもありましたように、明るくですね、活力のある方向に将来を持っていきたいという話、方向性ですね。あとは将来の立場に立って将来の方に、子や孫に負担を残さないということが大事かと思っております。

もう一つは、何名かの委員からの意見がありましたように、維持・修繕とかにシフトしていくとか、メンテナンスにシフトしていく、あとは直さない橋梁を許容するということは致し方ないという意見がございました。

優先順位に関しましては、いろいろなご意見がありまして、先ほどの木村委員からもありましたように、

群マネですね、県が市町村をフォローする仕組みを作っていくということ、県が主導してやっていくということが必要ではないかということですね。

優先順位に関する2つ目は、生活者の目線に立って、住民の目線に立って、その優先順位を決めていくということですね。

プラスして、それはデータに基づいて見える化していく、例えばカルテのようなものを作って、住民がすぐに見えるようなものにしていくということが大切ということでした。

優先順位に関する3つ目としては、他の県とか富山市の例などですね、そういった優先順位を考える上で、先進事例を集めてですね、その先進事例を参考にしながら進めるということ、また合意形成をしていくところでも、そういった工夫が必要であるということがありました。優先順位に関しては、その3点が大きなところだと思います。

自分事化に関しては、どのように進めていくか、どのように伝えていくかということを考えていく必要があるということですね。

磯部委員からの意見もありますが、どう市民を巻き込むかというアイデアを出していくことが大事だよという話があったり、そのアイデアに関して、いろいろな意見がございました。インパクトのある取り組みだったり、官官連携で市とともにやっていく。

一番インパクトがあったのは、橋を通行止めにして、それをどう活かしていくか、動きのあるイベントにしていく、ドラマを撮るとかですね、そういった上で何かをする、その通行止めにしたことによってそれを何か活かしていくということ。ポジティブな方向に持っていく、それによって地域を良くして、橋に愛着を持ってもらう、どう愛着を持ってもらったかということがあったかと思います。

それで最後に松田委員からもありましたように、やっぱり今までは自分事でなくても良かった時代なんです、それを時代の流れ、災害が多くなってきて老朽化も進んできて、財政的にも厳しくなってきた。避けたいのはわかるけど、私のインフラということにしていくのは、かなり工夫が必要で、皆からアイデアを出していかないといけないという話がありました。

あと一つは土木の魅力です。私も松田委員と同じで、大学の教員なので土木の魅力を発信しないと高校生が入ってこないという立場でありますので、プラス、高校生が入ってきた高校生の入り口もありながら、それを建設業界とともに土木人材としていくという流れがあるので、高校生が入ってこなくなると、全てがですね、人材が不足してしまいますので、そういったところもあります。

それは方向性のところかもしれませんが、あるかなと思いました。以上、羅列的にまとめさせていただきましたけど、皆さんの意見としてはそういった流れが大きかったと思います。

まだ時間がありますので、何か補足しておきたいことがあればよろしくお願いします。

今、私が言ったことで正しいでしょうか。大丈夫でしょうか。

【近藤委員】

すみません、せっかくなので、松田委員からの大変心強い言葉をいただきましたので、もう一点だけ、日頃から建設業協会としてすごく問題視といたしますか、課題としていつも挙げられますのが、例えば昨日も大きな地震が発生しました。自然災害、有事の際に、実は一番最初にその現場に駆けつけているのが、その地域地域の地元の建設会社の皆さんなんです。

ですが、どちらかというとスポットライトが当たるマスコミの方で取り上げられるのは、例えば自衛隊、警察、消防、そこまでなんですよね。なかなか建設会社の姿がスポットが当たらない。例えば日々の富山においても、除雪の作業も、建設業協会の会員企業の皆さんが朝早くから、それこそお酒も飲まずに前の日から待機されて対応してくださって、毎日の皆さんの生活が保たれているっていう現実になかなか目を向けていただけてないのが現状です。

ですので、先ほど松田委員からのお言葉がありましたけれども、エッセンシャルワーカーとしての建設業の魅力ですとか、やっぱり社会的な地位の向上ということも、実は今後しっかりと目を向けていただかないと、地域の守り手自身が、本当に人がもう少なくなってますので、橋梁ですとか、道路の維持管理すらも、それを担う人がいないという状況が、実は後ろにある課題なんじゃないかなと思いますので、もし今回の中で、そういったこともテーマに捉えていただけましたら大変嬉しく思いますし、本当に目を向けないといけない大きな課題ではないかなというふうに感じておりますので、ぜひよろしく願いいたします。

【伊藤座長】

ありがとうございました。

維持管理をしていく上でも人が大切なので、そういったことも考えていかないといけないかなと思います。よろしいですかね。

それでは、羅列的にまとめましたけど、最後に事務局から今後の予定についてご説明をお願いいたします。

【事務局】

本日は委員の皆様、様々な角度からご意見をいただきまして、また、座長の方も取りまとめをいただきまして、大変ありがとうございました。「資料4」にも書いてございましたが、今年度は今後3回程度の開催を予定しております。

本日の貴重なご意見を整理いたしまして、次回以降、議論を深めてまいりたいと考えております。

【伊藤座長】

ありがとうございました。

それでは、今日ですね、同会の議事はここまでとしまして、最後に川上部長からコメントをいただきたいと思えます。よろしくお願いいたします。

【川上部長】

委員の皆様、今日は「持続可能なインフラマネジメント」という大変難しいテーマにつきまして、ご議論いただきまして、本当にありがとうございました。委員の皆様からいただいたご意見は、伊藤座長にまとめていただいたところでございますが、次のワーキングの開催につながる大変貴重なご意見をたくさんいただいたと思っております。

まさに生活者目線で、そしてこれを担っていただく建設業の皆様の立場、重要だということで、まさに未来志向で、いかに明るい方向に持っていくかということが大事かなと思っております。

我々世代もそうですが、子ども、孫、さらにはこれから生まれてくる世代に何を残せていけるのかということを実際に考えていければと思っております。

今後いただいた意見を踏まえまして、また次の論点、方向性を整理しながら、できるものは小さいものでも、早い段階から取り組んでまいりたいと思っております。委員の皆様におかれましては、今後ともご協力のほど、よろしくお願いいたします。本日はどうもありがとうございました。

【伊藤座長】

川上部長、ありがとうございました。予定の時間にもなりましたので、本日はこのあたりで議事を終了させていただきますと思えます。長時間にわたり、自由闊達なご意見をいただきまして、ありがとうございました。